
9. 心を合わせて生活の夢を分かち合う「もやい方式」による住まい・コミュニティづくりの提案と実践

M (もやい) ポート
(熊本県熊本市)

I. 活動の目的と背景

M (もやい) ポートは1992年12月に竣工した。これまでの多くのコーポラティブ住宅とは異なり、その完成に至るプロセスにおいて公的な機関には依存していない。これまでの主な経緯は次の通りである。

1989年5月「熊本もやい住宅の会」を開催。ユーザー希望者をはじめ建築関係、行政、学生等年齢層も様々な約100人の参加があった。この日に正式に会を設立。

その後定期的に集まり、環境ウォッチングや講演会、先進事例(Uコート、あじろき横丁、ROJIコート、都住創)の見学会、バーベキュー大会等を行う。

90年5月 会のメンバーの情報より土地取得。

90年10月 ユーザー募集のシンポジウム開催毎に一人というテンポでユーザー(この時点で10人)が集まり、津浦もやい建設組合の設立。

91年2月 陣取り合戦。

91年3月 設計開始。

91年11月 着工。

92年7月 上棟式。

92年12月 竣工。

この間一難去ってまた一難の、実に波乱に満ちた道のりであった。これを乗り切ることができたのは、多くの人の協力はもとより、会の結成以来3年半、ほぼ欠かすことなく毎週1回の集会を地道に続け通したことによるところが大きい。来られる人が来る、決して無理強いしない。ビジネス的にきっちり公平というより、少し余裕のある人が少しずつ力を出し合って、困っている人を助けるという<やわらかい秩序と多様な自律性>としての「もやい」を基本として進めてきた。効率的・合理的ではなく<不便さの中の豊かさ>を求め<トラブルをエンジン>にする「も



助成金を活用した集会所の建具



ヨーロッパで活躍している音楽家による
ハウスコンサート

やい方式」で乗りきってきた。

しかし「もやい住宅」は完成に至る過程はむしろ序盤戦であり、完成後の周囲を取り込むコミュニティづくりにその真の価値がある。Mポート16世帯の「もやい方式」による、周辺地域に開かれた具体的なコミュニティづくりを展開し、併せて第二、第三の「もやい住宅づくり」の拠点となることを目指す。

II. 活動の内容と方法

「もやい」は、私たちの活動の中で、住まい・コミュニティづくりの柱となるコンセプトである。九州にはかつて、生活や行事などを生活者間で助け合う習慣があり、それが「もやい」という柔らかい響きの言葉で表現されていた。しかし、現在は、ほとんど使われることがない。

私たちが言う「もやい方式」とは、次のようなことである。まず楽しみを分かち合う。決してお互い無理強いせず、公平さを強要しない。お互いのプライベートなことには基本的には立ち入らない。

この「もやい方式」で、(1) まずユーザー自身が楽しむ活動を基本とする (2) 同時に、ご近所の大人や子供たちに呼びかける、という方法で活動を行ってきた。内容によっては、もっと広範囲に呼びかけた。このような方法により、活動が楽しく長続きする。活動の内容と方法は以下の通りである。

1. 拠点づくり（もやいサロンの整備）を行う

もやいサロンは、Mポートのコミュニティを育む楽しみ場であり、同時に周辺地域に開かれた場でもある。第二、第三の「もやい住宅」はもとより、周辺環境づくりの活動の拠点となる。

2. ビルディング・トゥゲザー方式の活動を行う

植栽や階段まわりの仕上げや集会所（もやいサロン）づくりを、ビルディング・トゥゲザー方式、つまり楽しみながらの住み手の協働によって行う。特色ある共用空間の実現のみに留まらず、そのプロセス自体が16世帯のコミュニティ熟成のために大きな役割を果たす。

3. 子育て環境づくりをめざす

「もやい住宅」は理想的な子育て環境の場でもある。Mポートにおける日曜日の午後などは、

第二第三のもやい住宅を
生み出すための活動



よちよち歩きの子供から中学生まで、実に仲良く遊んでいる。かつての社会ではよく見られたが、今では本当に珍しい光景になった。内外の子供たちの多様なグループ遊びを支援するハード・ソフト両面にわたる、子供の目線からの環境づくりを展開する。

4. ビオトープ（生態系の保全）を大事にする

周辺環境は独特の湿地的自然生態が存在するので、それを保存すると共に、まさに「生き物」を取り戻すアーバン・エコロジーを提案する。

III. 活動から得た結論および考察、今後の課題

先日の4月17日に、いよいよ第二の「もやい住宅」づくりの活動がスタートした。具体的に住み手を希望する3人を含む約30人の人々が集まった。

Mポートの場合も、はじめは住み手を希望する人は3人程度であった。県や市、公団等の信頼できる公の機関が関わっているわけでもない。チラシを見たり講演を聞いて、住まい方に何らかのこだわりを持つ人それぞれが独自に判断して、それも各集まり毎にかろうじて1人ずつ飛び込んできた結果である。

地方におけるコーポラティブ住宅の活動は、(1) 大都市のように住宅・都市整備公団を利用できない (2) 大都市に比べると価格的には比較的住宅が手に入りやすい（戸建て住宅も価格的には可能）、やはり戸建て志向が根強いなど、コープ住宅の展開にはマイナス面が多い。これらのマイナス面が具体的に与える影響として、(1) はユーザーにかかる負担が大きくなる、(2) はユーザーが集まりにくいということである。しかしMポートがそうであるように、このようなハンディを乗り越えて実現した「もやい住宅」は、住み手の期待に見事に応え、かつコーポラティブ住宅本来の周辺を巻き込むコミュニティづくりのエネルギーを持続する。

ヒトが生きていく上でいかに住まいの環境が大事かを常に提案し、多様な住み方の中での一つの魅力的な方法として「もやい住宅」を提案していきたい。第二、第三の実現に向けて、時間をかけて地道な活動を続けていきたい。